ちいさなてんしたちへ

せいしょから10のおはなし

文／サラ・ドッド　絵／ドゥブラヴカ・コラノヴィッチ　訳編／女子パウロ会

ちいさなてんしたちへ

せいしょから10のおはなし

文／サラ・ドッド
絵／ドゥブラヴカ・コラノヴィッチ
女子パウロ会

せかいがはじまったとき

むかし、むかし、いちばんはじめに、かみさまはこのせかいをおつくりになりました。せかいは、とってもきれいでした。お日さまがあたたかい光をふりそそぎ、木や草がたくさん生えて、それぞれに花をさかせています。

いろいろなどうぶつや、ことりが、あそんだり、うたったり、水には魚がゆうゆうとおよいでいて、みんなたのしそうでした。

それから、かみさまは、人をおつくりになりました。アダムという男の人と、エバという女の人です。かみさまは、うつくしい庭にふたりをすまわせて、おっしゃいました。「ごらん、ここには、なんでもそろっている。なんでも食べていいよ。ただね、あそこの木の実だけは食べないで。あれを食べると、ここにはすめなくなるし、わるいことがおきるからね。」

ある日、へびがそっとエバに近づいていいました。「ねえ、かみさまは、ほんとにあれを食べてはいけないとおっしゃったの？　いちばんおいしいくだものなのに。かみさまは、きっとほんとのことをおっしゃらなかったんだ。食べてごらんよ。だいじょうぶだから。」エバはためしに手をのばして、その実をとって食べました。そしてアダムにも食べさせたのです。

とたんに、ふたりは、なにかわるいことをしてしまったと気がつきました。
ふたりは、かみさまに見つからないようにしようと思いましたが、それはできません。かみさまはとてもかなしそうにおっしゃいました。
「もうここから出ていってもらわなければならないね。」
ふたりが、庭から出ると、てんしが門をしめました。まぶしいくらいあかるくて、うつくしかった庭には、もうだれも入っていかれません。
「これからは、やさいも、くだものも、じぶんたちでつくらなければならないんだね」と、アダムはためいきをつき、かたい土を見ながらいいました。
「つらいしごとになるだろうな。」
でも、かみさまは、人をきらいになられたのではありません。わるかったとわかってくれたら、またともだちになりたいと、かんがえていらっしゃいました。

かみさまのおいいつけをきいたノア

アダムとエバにはこどもが生まれ、その子たちも大きくなって、けっこんし、人はどんどんふえていきました。でも、みんながなかよくするのは、むずかしいことでした。ひどい人はけんかばかり。だけど、ノアはちがいます。ノアはとてもいい人で、かみさまをだれよりもたいせつに思っていました。

ある日、かみさまがおっしゃいました。「これからずっと雨がふりつづくよ。あなたは大きな大きなふねをつくりなさい。そしてわたしがいうとおりのものをのせるのだよ。」

ノアがふねをつくりはじめると、人びとはわらいました。
「こんな水のないところで、大きなふねをつくって、
うくわけないだろ。どうするんだ？」そこへ、
ぽつん、ぽつん、と雨がおちてきたのです。
ノアは かみさまがおっしゃったとおり、
いろいろなどうぶつをのせ、
じぶんと家族ものりこみました。
すると、かみさまが戸をしめてくださいました。

雨はどんどんひどくふりだし、くる日もくる日もつづいて、
とうとう町も山も水にしずんでしまったのです。
やっと雨がやむと、ふねは山のいただきにぶつかって
とまりました。「かわいた土地があるかなあ」と、
ノアはいって、ふねの中からはとをとばしてみました。
しばらくして、はとはもどってきました。
くちばしに小さなみどりのえだを
くわえていました。どこかに
木がそだっているのです。
ノアが重い戸をあけると、どうぶつたちは
おおよろこびで外に出ました。
　ノアと家族も、新しくてうつくしい
せかいにおりたつことができたのです。
雨あがりの空に、きれいなにじが
かかっていました。
かみさまはおっしゃいました。
「もうにどとこんな大水はおきないよ。
あのにじがやくそくのしるしだ。」

かみさまとアブラハムのやくそく

アブラハムとおくさんのサラは、なかよく、たのしく、くらしていました。たくさんのひつじややぎをかいながら、草のおおいところを見つけてはうつっていく、テントのくらしでした。ふたりは、なかよく、たのしく……といっても、こどもがいないことは、とてもさびしかったのです。

ある日、かみさまがアブラハムにおっしゃいました。

「あなたとサラに、男の子をプレゼントしよう。その子はわたしのとくべつな家族のはじまりとなり、しそんは、空の星のようにたくさんになる。」

アブラハムはいいました。

「かみさま、あなたをしんじます。」

それから、ながいあいだまちました。でも、なかなかこどもは生まれません。
「かみさまは、やくそくをきっとまもってくださる」と思おうとしますが、
サラはじしんがもてません。「わたしは、もう年をとっているし、
おかあさんになるのはむりでしょう。」
ある日、テントの外に、三人のおきゃくさんがやってきました。
よろこんでむかえて、アブラハムはいいました。
「さあ、すぐにパンをやきますから、中に入って、
しょくじをなさってください。」
三人はしょくじをしながら、アブラハムにいいました。
「わたしたちは、来年もまたきます。そのとき、おくさんには、
あかちゃんが生まれていますよ。」
サラはかげでそれを聞いて、「この人たちは、なにをいっているのかしら。
わたしは、もうこんなに年よりなのに」と、こころでちょっとわらいました。
おきゃくさんはいいました。「サラはどうしてわらうのですか。
かみさまにおできにならないことはありませんよ。」
そのとき、アブラハムはわかりました。「この人たちはてんしだ」と。
つぎの年になって、てんしたちがいったとおりに、男の子が生まれました。
なまえはイサク（わらう、といういみ）とつけました。
この子をだいて、アブラハムはいいました。
「かみさまは、ちゃんと、
やくそくをまもってくださるかただよ。」

かごのなかのあかんぼう

かみさまからとくべつな家族といわれたアブラハムとイサクのしそんは、イスラエル人とよばれるようになっていました。ある年、すんでいたところにじゅうぶんな食べものがなくなったので、みんなでエジプトの国にいきました。そこでは、むぎもやさいもたくさんとれたからです。でも、にんずうがおおくなったので、エジプト人からきらわれるようになりました。

エジプトの王さまは、いいました。「こんなにイスラエル人がふえたら、わたしたちよりつよくなって、国をとられるかもしれない。どうすればいいか。」そして、「男の子が生まれたら、みんな川になげこんでころしてしまえ」と、めいれいしました。

ひとりのおかあさんは、なんとかして、あかんぼうをまもろうとしました。ひとつのかごをじゅんびし、水が入らないようにくふうして、それに、あかんぼうを入れ、そっと、水べの草のかげにおいたのです。そして、「この子を見ていなさい」と、むすめのミリアムにいいました。

「わにがきたらどうしよう？」と、ミリアム。おかあさんはいいました。

「だいじょうぶ。かみさまが、きっとこの子をまもってくださるから。」

そのうちに、エジプトの王女さまが、おつきの人をつれて、水あそびにやってきました。王女さまは、あかんぼうの入ったかごを見つけると、「かわいそう」といいながら、とりあげてくれました。

「水からたすけたんだから、モーセというなまえがいいわね。でも、どうやってそだてたらいいかしら。」

このときとばかり、ミリアムが出てきて、「王女さま、わたしは、たすけてくれる人を知っています。よんできましょう」というと、いそいで おかあさんをつれてきました。

王女さまが「この子のめんどうをみてくれますか？」ときくと、おかあさんは、

「もちろん」といいながら、よろこんでモーセをだきとり、こころから、かみさまにかんしゃしました。

あぶないめにあったダニエル

アブラハムとモーセのしそん、イスラエル人はまたとてもおおぜいになりました。せんそうがあって、どこか遠い国につれていかれたときでも、みんなかみさまをだいじにし、おいいつけをまもらなければならない、としんじていました。ダニエルというわかものは、遠い国で、そこの王さまにつかえていました。王さまは、よくはたらくダニエルをかわいがったので、ほかのけらいたちはおもしろくありません。「こいつをなんとかこらしめてやろう」と、ねらっていました。

ある日、けらいたちは王さまにいいました。「王さま、王さまは、かみさまのようです。この国では、王さまいがいのものをおがんではいけない、というきまりをつくってはいかがですか？」「うん、いいね。だけど、もし、ほかのかみをおがむものがいたら、どうする？」

みんな口をそろえていいました。「そんなやつは、ライオンのおりになげこんでしまいましょう。」

ダニエルも王さまがきめたことをやぶりたくはなかったのです。でも、かみさまは王さまよりもずっとたいせつです。ダニエルはまいにちきまった時間に、まどのところでおいのりをしていましたが、王さまのめいれいが出たあとも、やめませんでした。それを見たけらいが王さまにつげぐちをしました。「王さま、きまりをおぼえていらっしゃいますか。ダニエルをライオンのおりにほうりこまなければ。」

王さまは、こころがいたみましたが、じぶんがきめたことです。やくそくをまもらなければ、みんながもうじぶんのいうことをきかなくなると思ったので、しかたなくそうするようにいいました。けらいたちは、ダニエルをライオンのおりにほうりこみました。えさをもらっていなかったライオンは、すぐにとびかかって食べてしまうでしょう。

その夜、王さまはしんぱいで、ねむれませんでした。つぎの朝、すぐにライオンのおりにいってみると、どうでしょう、ダニエルはげんきで、ライオンのそばにいるではありませんか。かみさまが、てんしをおくって、まもってくださったのです。

王さまはよろこんでいいました。

「ああ、おまえのかみさまはすばらしい！」